

乳児—保育者間の愛着関係の変容過程

— 質的データによる量的データの妥当性の検討 —

上 田 七 生

(2003年9月30日受理)

The process of change of infant-nursery school teacher attachment:
An examination on the validity of quantitative data comparing with qualitative data

Nao Ueda

The main purpose of this study was to examine the validity of quantitative data related to infant-nursery school teacher attachment. Firstly, qualitative data for 9 months were extracted from the same data which had once been sampled quantitatively. Secondly, the qualitative data and the quantitative data were compared. It seemed that infants went through the similar process in both data. That is, the infants began to show attachment behaviors toward their nursery school teachers and developed stable relationships with them. And the infants became to be able to control themselves, and to play with friends calmly. In conclusion, the validity of quantitative data for infant-nursery school teacher attachment was confirmed by comparing with qualitative data.

Key words: infant-nursery school teacher attachment, qualitative data, quantitative data, validity
キーワード：乳児—保育者間の愛着関係、質的データ、量的データ、妥当性

乳幼児（乳児は3歳未満の子ども、幼児は3歳以上の子どもとする）は、保育所や幼稚園に通いはじめると、担任の保育者との間に愛着関係を形成させていくことになるが、その愛着形成には第一愛着対象者との愛着関係が大きく影響する。Leiderman (1989) は、Bowlby (1980), Main (1991), Sroufe, Egeland, & Kreutzer (1990) らの見解、すなわち、第一愛着対象者に関する愛着のモデルが絶対的なものとして存続し、その後の多くの関係の基盤になるとの考えを否定的に捉え、後に愛着障害や社会的不適応が生じるのは早期に経験するほとんどの関係が不安定な場合であり、たとえ第一愛着対象者との関係が崩壊していたとしても、その他の愛着対象者との間に少なくとも1つ安定した愛着関係が存在すれば、その後の愛着関係や対人関係様式は十分安定したものに発達し得ると主張している。また、愛着のモデルが幼児期から成人期に至る発達過程の中で大きく変化する可能性を指摘する研究（遠藤, 1992）もある。Leiderman (1989), 遠藤 (1992)

の主張に従えば、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児であっても、その後に安定した対人関係を形成することができるといえよう。保育所や幼稚園の保育者は、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者となり得る (Mitchell-Copeland, Denham, & DeMulder, 1997) し、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児が、代理の愛着対象者としての保育者との間に愛着関係を形成させて安定することができれば、それを基盤として周囲の人々と安定した対人関係を築いていくことができると考えられる。

上田・山崎 (2003) では、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児（女児, 2歳5ヶ月）について、対象児が保育者との間に愛着関係を形成させていく過程、およびその愛着関係の変容過程、第一愛着対象者との関係の変容可能性について検討した。その結果、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児が、徐々に特定の保育者との間に愛着関係を形成させていくこと、その愛着関係が安定するにつれて、見知らぬ人物

方法

や観察者との身体接触が減少することが明らかとなった。また、友達に対する優しさが芽生えるなど、友達関係に変化がみられたり、第一愛着対象者との関係改善の可能性も示された。

さらに、上田 (2002, 2003) では、上田ら (2003) よりも月齢が早く性別の異なる対象児 (男児, 1歳3ヶ月) について検討した。その結果、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児に特徴的にみられる、見知らぬ人物や観察者に対する愛着行動 (鯨岡, 1988; 金子, 1993; 上田ら, 2003) があまりみられなかったこと以外は、ほぼ同様の傾向が示された。

これらの研究 (上田, 2002; 2003; 上田ら, 2003) は、すべて、対象児の保育者に対する愛着行動の量の増減から検討を行ったものであった。また、1分間隔のタイムサンプリング法によるコーディングを行ったため、データとして抽出されていないやり取りも少なからず含まれていると予想される。愛着関係の変容過程を検討する際には、質的なデータ、すなわち、対象児と保育者とのやり取りの内容が重要となるであろう。したがって、これまでの量的なデータの中ではみることができなかったやり取りについても検討する必要があると考えられる。

そこで、本研究では、上田 (2003) で扱った量的なデータについて、さらに、質的なデータを抽出し、両者を対応づけることによって、量的データの妥当性を検討する。

対象者

(1) 第一愛着対象者との愛着関係が不安定なしげと (男児, 2歳10ヶ月) (対象児の名前は仮名である)。K保育所の3歳未満児クラスに通う。

(2) 3歳未満児クラス担当の保育者。主任はとうま先生ともとき先生 (保育者の名前はすべて仮名である)。

観察期間・観察時間

観察期間は、2002年7月～2003年3月。観察時間は、午前9時半～10時半。

観察内容

1週間に1度、乳児室において対象児と保育者とのやり取りを観察した。1～2ヶ月に1度、初対面の人物を乳児室に連れて行き、対象児の行動を観察した。同様に、週に1度だけ顔を合わせる観察者に対する対象児の行動も観察した。

記録方法・分析方法

乳児室における対象児の行動および大人 (保育者、見知らぬ人物、観察者) に対する愛着行動等をビデオカメラで録画した。

(1) 量的なデータ：愛着行動に関しては、事前の観察結果とAQSを参考にしてチェックリストを作成し、KJ法によりチェック項目を4カテゴリーに分類した (表1)。カテゴリーに含まれない行動については、「その他」の行動として分類した。タイムサンプリング法を用いて、1分ごとに、観察された行動について

表1. 愛着行動の4カテゴリー

【愛情欲求カテゴリー】

1. 保育者の前で、ぐずぐず言う。
2. 保育者の背によじ登ったり、ひざに座ったりといった身体接触を持つ。
3. 保育者の注意をひこうとする。
4. 保育者の行動を見て、保育者の行動や物のやりとりをまねる。
5. 保育者と一緒に遊ぶ。

【安全基地カテゴリー】

1. 機嫌が悪かったが、保育者が抱くと、すぐに泣くのをやめ落ち着く。
2. 保育者の居所に注意を払い、保育者の近くに留まったり、戻ってくる。
3. したいことがあるとき、保育者を頼りにする。
4. 初めての訪問者が来ると、保育者のもとへかけていたり、保育者の陰から覗く。

【人なつこさカテゴリー】

1. 機嫌が悪かったが、保育者以外の人がなだめて受け入れる。
2. 初めての訪問者に近寄る。
3. 初めての訪問者におもちゃを見せたり、自分のできることをやって見せたりする。
4. 初めての訪問者と一緒に遊ぶ。
5. 初めての訪問者に抱っこや肩車などをしてもらう。

【従順カテゴリー】

1. おもちゃを大切に扱う。
2. 保育者がすることを嫌がらずに待つ (服の着替え、鼻かみなど)。
3. 保育者に言われたことをしようとする。
4. してはいけないことを注意され、やめる。

コーディングした。観察時間は1日につき約1時間であったが、日によってその時間が異なったり、対象児が撮影不可能な範囲にいることもあった。そこで、単位を統一するために、対象児ごとにコーディングされた行動について、出現率（カテゴリごとの行動の頻度 / その日の観察時間）を求めた。出現率の9ヶ月間の推移によって愛着関係がどのように変容したかを検討した。なお、愛着行動には、「従順」カテゴリの行動は含まなかった。従順カテゴリに属する行動は、愛着関係の安定・不安定にかかわらず、どの子どもにも多くみられると判断したためである。

(2)質的なデータ：ビデオテープに記録されている対象児の行動をすべて記述した。

さらに、観察場面以外での子どもの様子や母親との関係について、保育者に記録してもらった。

結果と考察

図1は、第一愛着対象者との愛着関係が不安定なしげとの、保育所における行動全体を示している。7月～8月にかけてと、10月～12月にかけては、行動全体に占める愛着行動の割合が多かった。図2は、各保育者に対するしげとの「愛情欲求」行動の量を示している。「愛情欲求」行動の量が多かった7月～8月と10月～12月を比較すると、7月～8月の時期は、「愛情欲求」

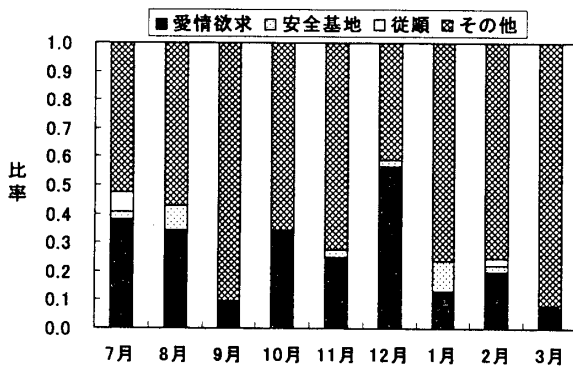


図1. 保育所におけるしげとの行動全体

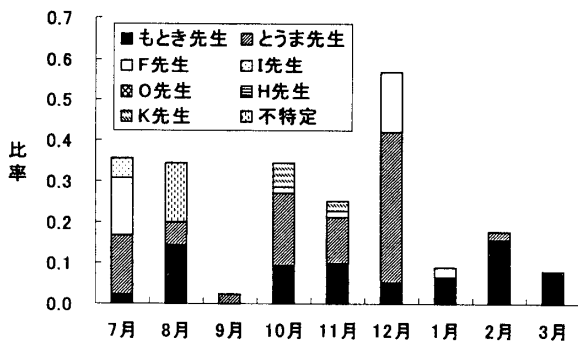


図2. 各保育者に対する「愛情欲求」行動

行動が複数の保育者に対してほぼ同等に向けられているのに対し、10月～12月の時期は、特定の保育者に対する「愛情欲求」行動が多くなっていった。すなわち、10月～12月の時期において、しげとはとうま先生との間に愛着関係を形成していったと考えられる。なお、保育者の話によれば、しげとはとうま先生との間に愛着関係を形成させはじめると、とうま先生がいないときに強い不安を覚えるようになったため、10月以降は意識的にしげともとき先生がかかわる機会を増やしたということである。その結果、10月以降、保育所におけるしげとの主な愛着対象者はとうま先生、次いでもとき先生という構造ができたと考えられる。

そこで、7月～8月および9月の時期と、10月～12月の時期について、具体的な事例をあげて検討する。

《事例①：7月》

とうま先生が、ダンボールを切り開いたものを何枚かつなぎ合わせ、乳児室に露天風呂をつくった。しげとは、お風呂の中で大はしゃぎである。勢いよく回転したり、ピョンピョンと飛び跳ねたりしている。そのうち、お風呂から出ていき、もとき先生に「先生、ほら！」とお風呂を指差しながら言う。もとき先生は「いいねー、お風呂」と答える。またお風呂に戻ってはしゃいでいる。I先生が外から乳児室に戻ってくると、「ほらー！」と言う。I先生は「お風呂！まあっ」と答える。とうま先生が職員室から戻ってくると、「先生、お風呂ー」と言う。とうま先生は「よかったねー」と答える。

《事例②：9月》

F先生が、みんなの前で絵本の読み聞かせをしている。F先生に後ろから抱きついたら、すぐに正面に回ってF先生の顔をのぞき込む。もとき先生の隣に座り、またすぐに小走り、本が見やすい場所に移動する。少しして立ち上がり、F先生が読んでいる本を“パンッ”とたたく。F先生が「やめてね」と言うと、F先生の後ろに置いてある本をF先生に渡す。F先生が「ありがとう」と言うと、ピョンピョンと飛び跳ねてからもとき先生に抱きつく。勢いよく抱きついたらため、もとき先生は自分の頭を押さえながら「なんでたたくん？」と言う。しげとは、もとき先生から離れて「バーカ」と言って座る。しばらく座った後、小走り移動し、とうま先生のひざに座る。I先生がお集まりの輪の中に入ってくると、I先生に抱きつく。

これらの事例から、7月～8月および9月の時期に

おいては、しげとが愛着行動を示す対象者は定まっておらず、どの保育者にも同じようなかわりを求めていたと考えられる。

また、以下の事例③および④は、しげとがわざと保育者の注意を引くような行動をしていると思われる例である。

《事例③：7月》

ダンボールで作った大きなサークルの中で、しげととS児が遊んでおり、とうま先生はサークルの外側に座ってその様子を見ている。しげととS児は、勢いよく飛び跳ねている。S児は寝転がったり、でんぐり返りをしたりする。そのうち、しげともS児も勢いがついた状態となり、しげとがS児をたたいてしまう。とうま先生は、「S君、やめて！元気がよすぎる」と注意する。S児は動きを止めるが、その横ではしげとがピョンピョンと飛び跳ね続けている。S児はとうま先生に言われたように、「やめて！」としげとに言う。とうま先生はS児に、「あなたに言うたの！寝たら危ないでしょー」と言う。しげとは、時折とうま先生の顔を見ながら飛び跳ねている。

《事例④：9月》

とうま先生が「さあー、お片づけしようかなー」とかけ声をかけると、その少し前からブロックを箱の中に集めていたしげとは、「お片づけしたー」ととうま先生のところへ箱を見せに行く。とうま先生はA児をトイレに連れていこうとしていたので、「ちょっと待って」としげとをよけてA児を追う。それと同時に、そばにいたもとき先生が「片づけしよるとこ行こっかなあー」と言うのを耳にする。しげとは金切り声で「お手伝いよーっ！」と怒る。もとき先生は「うん、わかっるとる」と言う。しげとはしばらくその場に立っているが、そのうち、わざとブロックを集めた箱を揺さぶってブロックをこぼし、箱を投げ捨てて去っていく。

これらの事例の波線部は、保育者が叱ることを予測した上での行動であると解釈できよう。しげとは、7月～9月までの時期において、保育者に怒られてでも、保育者にかまってもらいたいと思っていたのであろう。

一方、10月～12月の時期においては、事例⑤および⑥が示すように、しげとは特定の保育者のそばから離れたがらず、また、保育者が他児とかかわることを嫌がる傾向がみられた。

《事例⑤：10月》

しげとはもとき先生のひざに座っている。もとき先生は、そばでR児がY児の頬をつねっているのを目撃する。もとき先生がR児をとめに行くために立ち上がり、しげとはもとき先生のひざからすべり落ちる。しげとはすぐにもとき先生のところへ行き、仲裁しているもとき先生の肩に手をのせる。もとき先生は、R児をY児に謝らせようと両児を対面させている。そこへしげとが出てきて、もとき先生のひざに座ろうとする。もとき先生はしげとを横にどかせ、Y児をR児の前に引っぱる。しげとはY児をたたく。Y児はしげとをたたき返そうとするが、もとき先生がY児をとめ、R児とY児の仲裁を続ける。しげとはおもしろくなさそうな表情で、もとき先生の後ろに回り肩に手をのせる。その後、前方にいるS児のところに行き、S児が持ち上げているピストル（ブロックで作ったもの）をはたき落とす。

《事例⑥：11月》

しげとがとうま先生に抱きついていて、とうま先生が歩き出すと、しげともついていく。途中で見知らぬ人の横を通り過ぎるが、しげとと見知らぬ人とのやり取りは特にならない。とうま先生は用事を済ませると床に座り、しげともとうま先生のひざに座る。しばらくして、とうま先生は「ちょっと待ってね」としげとをひざから降ろし、再び用事を済ませにいく。しげとは後についていき、とうま先生が作業する様子を見ている。「先生、何するん？」と嬉しそうに聞いたり、手伝ったりする。

このように、特定の保育者のそばから離れたがらないという傾向は、愛着関係が安定していく過程での重要な指標となるであろう。保育者は、「離れたくない」といった愛情欲求を示す乳幼児に対して、その欲求をできる限り受けとめ、しっかりとかわる必要がある。しげとはとうま先生、あるいはもとき先生との間において、しっかりとしたやり取りを経験したことによって、両者との愛着関係が安定していったのであろう。

しげとは、12月までの間にとうま先生、あるいはもとき先生を安全基地とすることができたため、1月以降は、保育所における行動全体に占める愛着行動の割合が減少し、「その他」の行動の割合が増加した（図1）。すなわち、保育者のそばから離れることができるようになり、友だちとかかわりも増えはじめたといえよう。具体的にはどのような行動の変化があったのか、以下に事例をあげて検討する。

《事例⑦：2月》

しげとがおもちゃを押しながらとうま先生のところに行くと、とうま先生はピストル（ブロックで作ったもの）を持っている。しげとが「何？これ？」と聞くと、とうま先生はピストルを渡して「Jちゃんよ。『貸して』って（言っておいで）」と言う。しげとはピストルを持ってJ児のところに行きながら、「Jちゃん、貸してー」、「Jちゃん、しげとちゃんにもこれ作って」と言う。J児は「ダメ」と言ってしげとの持っているピストルをとり返す。しげとは一瞬とうま先生の顔を見るが、すぐにJ児の隣に座り、J児の様子をうかがっている。

以前は、友だちの持っているものを無理矢理に奪ったりすることの多かったしげとであるが、とうま先生やもとき先生を安全基地とすることができるようになってからは、徐々に、「貸して」と言ったり、我慢することができるようになりはじめた。その傾向が、事例⑦にも表れているといえよう。

《事例⑧：2月》

しげとは数名の他児とともにとうま先生のいるテーブルで絵を描いている。しばらくして、見知らぬ人が乳児室に入ってくる。しげとは、他児が見知らぬ人に向け寄っていく音や声で気がつき、その場から5秒ほど見知らぬ人を眺めて、再び絵を描き出す。そのうち、ふと顔をあげ、少し考えてから「H大のお姉ちゃん（観察者）は（どこに行ったの）？」ととうま先生に聞く^①。とうま先生がしげとの後ろのほうを指差すと、しげとは後ろをふり返り、観察者がいることを確認して^②、また絵を描き始める。しげとは、R児が「おーい、お兄ちゃん、おーい！」と見知らぬ人を呼ぶ声にふりむき、R児を見てから見知らぬ人を見る。他児と見知らぬ人が「おはよう」と挨拶しあっているのを笑顔で見ながら、とうま先生に「今日、お兄ちゃんだー？」と聞く。とうま先生は「うん」とうなずく。しげとは見知らぬ人のいるほうを見てから、観察者のほうを見て、また絵を描く作業に戻る。絵を描き終え、いろいろな人（保育者、観察者、見知らぬ人、他児）に絵を見せてもらった後、J先生のところへ行く。観察者を指差して「お姉ちゃん」、見知らぬ人を指差して「お兄ちゃん」とJ先生に言う^③。J先生が「行っておいで」と促すと、しげとは見知らぬ人のほうへ走っていく。見知らぬ人の肩に手をのせ、顔をのぞくと、見知らぬ人はしげとの肩を優しく“ポン”とたたき、笑顔を見せる。見知らぬ人の周りに他児が集まってくる

と、しげとは一歩下がって他児の後ろにいき、そこから見知らぬ人にピストルを向ける格好をする。

しげとは、9月～12月までの間、とうま先生やもとき先生のそばを離れたがらず、観察者や見知らぬ人に対しては、ほとんど関心がないように思われた。しかし、事例⑧にみられるように、とうま先生やもとき先生との愛着関係が安定した1月以降は、観察者や見知らぬ人に対しても興味を抱きはじめたといえよう。波線部①および②のように、観察者の居場所を気にしたり、波線部③のように観察者や見知らぬ人がいることを他の人に伝えるといった場面は、それまでのしげとにはみられないことであった。

1月以降におけるしげとの観察者や見知らぬ人に対する興味は、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児が、代理としての愛着対象者との間に愛着関係を形成する前に抱いている興味（鯨岡，1988；金子，1993；上田ら，2003）とは質が異なるものであると考えられる。後者の場合、乳幼児は、観察者や見知らぬ人のそばを離れられず、常に身体接触を求めるといった傾向を示すからである。事例⑧が示すように、1月以降のしげとの観察者や見知らぬ人に対する行動は、そばを離れることができないといったものとは異なっている。

以上、量的なデータと質的なデータを照らし合わせて検討した結果、矛盾した傾向はみられなかった。すなわち、質的なデータによって量的なデータの妥当性を確認することができたといえよう。

【引用文献】

- Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss, Vol. 3 Loss: Sadness and Depression*. London: Hogarth. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）1981 母子関係の理論Ⅲ：愛情喪失 岩崎学術出版社。
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の外観— 心理学評論, 35, 201-233.
- 金子龍太郎 1993 乳児院・養護施設の養育環境改善に伴う発達指標の推移—ホスピタリズム解消をめざした実践研究— 発達心理学研究, 4, 145-153.
- 鯨岡 峻 1988 初期母子関係の発達と愛着の問題 島根大学教育学部紀要(人文・社会科学), 22, 27-43.
- Leiderman, P. H. 1989 Relationship disturbances and development through the life cycle. In A. J. Sameroff, & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood*. Pp.165-190 New

- York : Basic.
- Main, M 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings and directions for future research. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. Pp.127-159 New York: Routledge.
- Mitchell-Copeland, J., Denham, S. A., & DeMulder, E. K. 1997 Q-sort assessment of child-teacher attachment relationship and social competence in the preschool. *Early education and development*, 8, 27-39.
- Sroufe, L. A., Egeland, B., & Kreutzer, T. 1990 The fate of early experience following developmental change: Longitudinal approaches to individual adaptation in childhood. *Child Development*, 61, 1363-1373.
- 上田七生 2002 乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程—第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), 51, 359-363.
- 上田七生 2003 乳児と保育者との愛着関係の形成および変容過程—第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に— 日本保育学会第56回大会発表論文集, 796-797.
- 上田七生・山崎 晃 2003 乳幼児の愛着形成に関する短期縦断的研究—保育者との関係が第一愛着対象者との関係に及ぼす影響— 保育学研究, 41.
(主任指導教官 山崎 晃)